

地球第十五卷第五號

昭和六年五月

日本火山學會創立の計畫に就いて

小川琢治

(大正六年四月四日東京地質學會、岩石學礦物學礦床學會、地球學園聯合總會席上講演)

我が日本は世界の中で最も火山の多い地方であるが、未だ火山學が獨立の學會として成立してゐない。萬國學術會議などで火山學が討議される場合があつても、測地學地震學など、共に地球物理學の會議の一分科となつて、問題の範圍の極めて廣い火山學の中の僅かに一部だけ地球物理學の一部門として存在が認められてゐるに止るのである。此の方面の研究が頗る面白い結果を收めつゝあるのは事實であるが、我々地質學者の立場から視れば、火山現象に關した問題は此の外に非常に多いから、此の如き状態に満足し難いのである。

我々地質學に従事するものから言へば、火山現象に關するあらゆる方面の研究にコオルデネーションを附けて、部分的研究を綜合し得る機關を設けて、本邦に於ける火山研究の進歩を圖るに非ざれば世界の學界に對して誇るに足る様な進歩は望めないかと恐れる。而して是は我々の双肩にかゝ

る責任であるのは勿論である。又た一面には廣く此の方面の科學知識を慾望する人士に鼓吹してその普及をも圖り、我々地質學を專攻するものばかりに限らず、火山現象の興味を持つ所謂ヂレッタントの觀察を獎勵することにして、初めてその目的が達せられるべきである。例へば遠方の山奥の火山の突然噴火する場合などにはその附近に熱心な觀測者があれば噴火の現經過が詳細に知れる譯で、特に輕微な活動を間斷なく注意することは地方人でなければ行ひ難い。故に研究と同時に一般人士の研究趣味をも喚起することは決して徒勞でない筈である。

我々の茲に火山學といふ範圍は極めて廣い意味に解して、岩漿に關係するあらゆる現象を含むもので、狹義の火山作用及び深處火山作用 *Pulvolcanism* は勿論溫泉の噴出鑛脈の成生等の如き火山作用の結果と認められるものをも含むのである。又た岩石で言へば火山岩及び深成岩の如き岩漿の固結したものゝ外に、その水中に堆積した凝灰岩をも含み、時代で言へば第四紀の活火山及び熄火山の如く活動に移り得る極めて新らしいものゝ外に、第三紀及びその以前のあらゆる時代に於ける岩漿の活動に關聯した問題までも含まれて差支なく、又た之を研究することが現在の火山作用を正當に解釋するに必要な場合も常にあると考へる。

我々が火山學會創立を思ひ立つた理由は大略右の通りで、最初から完全な機關を具備した學會として獨立したものであることは必しも望まない。火山學の箇々の方面に就いて多少とも現在までよりも方針のある徹底した研究が出来る様に、その第一歩を踏み出したのである。

今日までに一定の方針の下に行はれたのは震災豫防調査會の創立以來地震研究所の出来るまでの

間に發表された火山調査 Vulcanological Survey が唯一で、活火山及び新火山の地質圖が出来たのはその特筆すべき功績である。この事業は現在如何なる状態にあるか私は研究所には門外漢であるから知らぬが、若し繼續してゐないとすれば甚だ遺憾である。何とかして調査未了の諸火山も地質圖を作り主要火口の位置及び構造形態に就いて一通り判る様にしたいものである。幸に東京其他の地質學教室に卒業論文の附圖がある譯で、之をそのまま公にし得ぬとしても、之を基礎として補訂したならば、未だ地質圖のない火山の中で相當多くは信頼を置くべき地質圖が得られる望がある。

田中子爵は震災調査會火山調査の初期に日本火山圖譜の編纂を思ひ立たれて數葉だけは作製されたと記憶するが、此の編纂事業の如きは差し當り再び試みて世界に發表することは最も望ましい。

火山活動の研究は從來大島磐梯吾妻等のクラシカルなる調査が行はれて以來、大抵著しい噴火のある毎に一應の踏査報告が出てゐる。その中には有珠樽前櫻島の如く、非常にインストラクティブな結果もある。特に昨年の北海道駒ヶ嶽の噴火は諸大學から現場の調査研究に出張されて色々有益な觀測が行はれ、數量的にも精密な材料を獲られたのは確かに本邦火山學研究に一つの新しいエポックを作つたもので、我々の大に意を強うする所である。

然れども火山活動の研究には現在から過去の地質時代に溯つて我が群島地盤に岩漿が色々の時代に上昇した過程を精密に知ることを忘れてはならない。洪積世以後の噴火現象を觀れば古い浸蝕されて地形の失はれたものの上を新らしいのが被覆してゐることが認められるが、第三紀に溯つても亦た同様であり、更に溯つて中生代及び古生代にも同じ現象が繰り返されたのである。此等の活動

の時期を確かめるのは層序學の問題である。日本の如く凝灰岩が各時代岩層に主要なる部分を占める土地ではこの研究は火山學上から必要なると同じ意義が層序學上にもある譯である。

故に火山活動を過去から現在に互つて研究するといふ地質學的方法は少くとも地球物理學的の方面の研究と兩々相並んで進歩すべきものである。

日本火山で現に研究所の設けられたのには淺間別府阿蘇の三ヶ所あるが、何れも主として地球物理學の方面の問題を眼目とし、その方面には色々面白い觀測が行はれ、現に重要なる成績を擧げ、又た將來擧げ得る見込もあると想像されるが、我々はそれのみでは尙ほ満足できない。

我々は今この兩方面を含んだこれ／＼の設備をした研究所を興したいといふ具體案を持つてゐる譯ではないが、我々同人がそれ／＼部分的に確實な研究の仕方を考案し、又た熱心な學者が専心之に従事し得る様になれば、完全な研究を實現する途も自から開けるであらうと考へる。

現にヂャワの如き母國と遠く離れた植民地で日本の如く多數の地質學者のゐない地方に於てすら火山に關する特別の報告書が公になつてゐるのに、日本に今日まで此の方面の獨立の研究機關がないのは海外の學界に對して頗る耻かしい氣がする。

我が地質學會の創立者で多年この方面を續けられた山崎佐藤兩君が一兩年の間に物故されたのは今この學會創立を首唱するに當つて深く遺憾に感ずる次第である。然れども私の如きも少くも棺箱に片足を入れたもので、以上述べた所は單に希望であつて、之を實現するには此の席に集まられた年壯氣銳の諸君の努力に待つ外ないのである。